



きかくてん どうぐ てんじひんかいせつ
企画展「昔のくらしと道具」展示品解説

～1960年代(昭和)まで使われた道具たち→電化して、ネット時代へ～

1 イカ釣り船：イカ釣り漁業は、夜、集魚灯に集まるイカを自動イカ釣り機によって釣り上げる漁業。泊漁港では、昭和40年代までは19トン未満の動力漁船が操業し、昭和42年からは30トン以上の大型漁船が出現した。船の大型化により、手狭になった泊漁港(間ノ口漁港)から、焼山漁港の整備が行われた。



2 デルビル磁石式電話機：1896年(明治29年)電話局の呼び出しは、電話機内部の磁石発電機を回し、電流を送って行った。昭和40年頃まで約70年間使用された。



3 600-A2形自動式卓上電話機：1963年(昭和38年～44年頃)日本電気株式会社の黒電話で、通話性能と経済性の上で完成された電話機といわれる。日本において、初めてプリント基板を使った量産型電話機。



4 足踏みミシン：足の踏み込みを動力にした縫い合わせる機械。約100年前から国産化され、戦後、和装から洋装に変わっていったときに、盛んに製造され、一般家庭にも広がった。ゆっくり踏んだりして、自分の好きなペースで縫うことができる。花嫁道具の一つでもあった。



5 洗濯板とたらい：洗濯のための板状の道具。波の形の段がついている。ヨーロッパで発明され、明治時代に日本に伝わる。今は、楽器(ウォッシュボード)や靴下などの予備洗いで使われることがある。



6 手回し洗濯機：洗濯物と水・石鹸を入れて、回すだけ。石鹸の泡が出て中の気圧が上がり、ふたを取ると一気に気圧がさがり汚れを落とすという仕組み。



7 火熨斗と焼きごて：火熨斗は、江戸時代から使われていて、丸い部分に火のついた炭を入れて、その熱で布のシワをのばす。焼きごては、火鉢の中に入れて熱くし、水を少しかけて蒸発すると、熱くなっていることがわかり、細かい部分などに使った。



8 炭火アイロン：明治時代に外国から入ってきた。フタを開けて火のついた炭を入れて、その熱で布のシワをのばす。昭和30年代の電気アイロンが広まり、しだいにその姿を消すこととなった。



9 テレビ・テレビジョンセット：1939年日本でテレビ実験放送開始。1952年松下電器産業が日本初の民生用テレビを発売。1956年には、NHKがカラーテレビ実験放送開始した。



10 真空管ラジオ コロンビア RA-71：ラジオは、ラジオ放送開始の大正14(1925)年から昭和にかけてテレビが出るまで流行した。日本コロンビアの全波スーパーラジオで、高級受信機。1948年にはオールウェーブ(短波と中波)として発売された。国民型2号が¥2,310に對して¥17,000もした。これは、その後続機にあたる。



11 行燈とランプ：行燈は江戸時代に普及した。それまでは火皿がおおわれていなかった。中央の火皿に油を入れ、木綿などの灯心に点火して使用。当時の和ロウソクはとて高く、主に菜種油を使用。庶民はさらに安い魚の油を使用。さらに貧しい人々は「暗くなったら寝る」という生活。明治時代に石油ランプが普及し始め、菜種油の行燈は姿を消していった。



12 昔の遊び：昭和30年代までの子どもたちの遊び道具。竹スキーからスキーセット。下駄スケートや手作りのソリ。手作りのコマや水鉄砲。自然の素材を生かした手作りの遊び道具が多かった。竹スキーは、地元で自生している細いアズマネザサを束ねて作られている。



13 昭和50年代のおもちゃ：自然素材のおもちゃからプラスチック素材のおもちゃに変わり、縁日やお祭りで売られたキャラクター面やだっこちゃんの人形など、多種多様なおもちゃが登場する。工業が発達してきたことが、おもちゃの素材の変化からもわかる。



14 唐箕：風力を利用して稲や豆、アズキなどの粳や豆を、藁くずやごみと分ける道具。明治、大正、昭和と、長く使われた。中国から伝わった箕なので、そう名付けられた。



15 千歯抜きと足踏み脱穀機：千歯抜きは、江戸時代の発明で、種粳を傷めずしごくことができたので、昭和の初めまで使われた。明治時代末になると、千歯抜きよりも性能のいい足踏み脱穀機が開発され広まった。



16 石臼：溝を掘った丸い石を重ねたもの。上下に重ねた石をすり合わせ、上の穴からそばや小麦、大豆などを入れて粉にするための道具。



17 天秤棒：両はじに重い物をぶら下げたり、たくさんの軽い物を取り付けたりして、肩に担いで運ぶ棒のことをいう。



18 えんつこ：赤ん坊をいれるワラ製のいれもの。ワラを敷いた上にボド（古い布）を敷き、底のところには灰も入れて小便などをしみ込ませるようにした。



19 火鉢：火鉢と炭は、奈良・平安時代から上流階級で使われ、江戸時代に広く使われた。近くによって暖をとり、炭火の上に鉄瓶をかけてお湯を沸かしたり、網をのせて餅を焼いたり、便利に使える。



20 ちゃぶ台：四本脚の円い形の食事用座卓。折りたたみ式で、上座、下座がなく、食事のほか、学習机や針仕事など家族が自然と集まった。大正時代から昭和の初めまで、全国的に使われた。いろり→箱膳・お膳→ちゃぶ台→ダイニングテーブルと食事風景が変化した。



21 腕用ポンプ：昭和14年に六ヶ所村が購入。人力でピストンを動かし放水する仕組みの消防のためのポンプ。明治8年（1875）に東京警視庁がフランスから輸入し、明治17年（1884）にドイツ製をモデルにして東京横山町の岡崎屋茂兵衛製作所で作られた。全国的にも現存する腕用ポンプは少なく、大変珍しい。



22 釣瓶井戸：井戸の屋形に滑車をかけて釣瓶桶で水をくみ上げるものを釣瓶井戸という。昭和30年代に入ると水道が普及し、姿を消していった。二又地区秋戸元太郎氏製作。

